

SPECIAL
INTERVIEW

可能なことだけを考える

映画人生四十年 車いすでメガホンを取る

すごい女性がいる。「家族」をテーマに描き続ける車いすの映画監督、槇坪夢鶴子さん。最新作『母のいる場所』では型やぶりの有料老人ホームを描き、独りで介護を抱え込まなくてもいいのよと、やさしく明るく説く。介護する人もされる人も、自分らしく「共に生きる」をテーマにこれからも映画製作をしたいと語る表情は明るく無垢である。その監督のうしろにいつも車いすを押す母上が寄り添う。

映画監督 槇坪夢鶴子さん



撮影 松木昭治



母のいる場所

—「母のいる場所」、監督のおっしゃるとおり、歳をとってもこわくない、笑って泣けて元氣の出る映画でしたね。ホンワカとして、実在の老人ホームでの口ケだったとか。こんな老人ホームもあつたんですね。

槇坪—あり得ないと言われますけどね、実際の老人ホームなんです。忠実に描きました、ごく自然に。

—こういうホームが多くなるといいですね。理想的で観終って暗くならない。

槇坪—そう。高齢の人々が自己主張してらっしゃる。小林桂樹さん、まるで八十歳以上の同窓会だなんて話されて。

—介護家族の煮つまつた葛藤も、よりよく生きてほしいという願いですよね。

槇坪—家の中に「介護」という地雷があつた。考え方ひとつで変わっていく。それが喜びになる。

—そこが、映画を明るいものにしていくのでしょうか。

槇坪—私はね、出来ないことは考えないことにしているんですよ。可能なことだけを考える。出来ることが十パーセントでもあれば、実現出来ると思う。出来ないことは助けてもらおう。実際、私は多くの方々から助け支えてもらっています。体が不自由でも痴呆の母親が私を助けて

くれているんですよ。今がハッピーなら最高って思うんです。体が不自由でも母と共にやるだけです。母と共に作り上げていく、子供にも自分を精いっぱい生きなさいと言っています。介護じゃなくてもいろんな選択肢があつてもいいと思つていきますから。

モデルとなった実在の有料老人ホーム、規則がなくて酒、たばこ、恋愛も自由。ひとりひとりが大切にされていて入居者とスタッフが共に暮らす。介護つと一緒に暮らす、一緒に生きることでしょう。

—撮影は何人位で。

槇坪—スタッフは四十名位ですね。入居者はエキストラで……そのうち、だれが役者かエキストラかわからなくなつたり（笑い）。スタッフも百八センチ位で大きいのもいますから、私などどこにいるのかわからない（笑い）、かくれんぼ。

—ホームも大変でしたね。

槇坪—それが自由なんです。老人ホームに社会の風が入って、皆さん益々元気づいて……（笑い）皆さん立派な役者さんですよ（又笑い）。

—歳をとつても皆さん生きいきとして。

槇坪—現実的には大変なことも多くあると思いますけど、見方をかえれば生きていくられる、自立した人間がいる、自分らしく生きていく、ネ。

—親を介護するってどういうことでしょうか。

槇坪—私は介護してありますから。母も私も要介護3、互いに力を出し合いながら、支え合いながら、どこに行くのも一緒。五分見えないと母が「あの子はどうした」でしょう。

—全国に展開中の上映会はいつもご一緒で。

槇坪—母親付きなんです（笑い）。五分前のことは覚えていないのに、私を学校に遅刻させちゃいけないと、その意識だけはあつて、心配してくれてます。私の姿が見えないとパニックになる。よく言つて聞かせてわかつて、又聞く。

人は夢をもつて生きられる

—介護あり、映画製作あり。

槇坪—エー。よく言われます、「車いすで仕事も介護も」と驚かれますがね。



お互いに助け合つて支え合つてますから。病氣でも老いても助け合う関係があれば、人は夢をもつて生きられます。母が生きることが幸せなんだと思ひ直す事ができるようにしました。

今でもね「ごはん食べて学校へ」って言うんですよ。今の炊飯器、いろいろスィッチがあつて、母にはわからないんです。炊けていない時があつて。生煮えはわかるんですよ。すると母は水を入れて又ガスにかけるんです。危ないんですけどね。だから今は先に「ごはん炊いて」「できたよ」って言うことにしています。私が杖をついて立つていられるのは十分位。杖が倒れたら拾えません。茶碗をもつて運ぶことも出来ませんが、母がやつてくれます。母と共に暮らしながら「老いる」ことを母から学んでいます。「老いる」ことを日々母が教えてくれます。又、励まされてもいます。トイレも二人で入ります。自宅はいいのですが、外出した時は大変です。食べることも大切ですが、出すことはもっと大切なことでしょう。子育ての時も食べた物がちゃんと出てくるか心配したでしょう。生きるってことですものね。

表はバリアフリー、裏は迷路

槇坪—障害者用のトイレ、健常者が堂々

と使っています。物置になっていきます。ホルダーが遠くて届きません。又、電気が切れたりして、非常ベルが高い所にある。これは介護する人に合せてあるからでしょうか。車いすの私には届かない。内鍵がかかる。母などパニックになって開けられない。これには困りました。外から言ってもわからない。だから一緒に入ることにしているのですがね。便座はつめたくて、それでも急には立ち上がれない。ウォシュレットにしてほしいですね、手摺は木製。鉄は冷たくて握れない。造るとき、健常者じゃなくて障害者に聞いてほしいですね。表はバリアフリーでも裏は迷路です。

先月、お話をいただいた村田幸子さんと同じようなことを語っておられました。一歩外に出ると「バリアフリー」だって。

槇坪―上映会の時も感じますね。控室にトイレがほしい。又、ご挨拶する時、必ずあるんですよ、二〜三段位の階段。健常者にはたった二〜三段でしようが…。上がるのが大変、五ミリの段差があっても大変なので。母が押しすからね、車いす。困るのはもう一つあります。

―なんででしょう。
槇坪―温泉、大好きなんですがね。露天風呂には入れませんね。足場が悪すぎで

す。車いすや身障者用の露天風呂ってあるのでしょいかね。

ポシエットは命綱

―ところで監督、いつもかわいいポシエットを下げられますが。

槇坪―これね、命綱なの。倒れた時、OSSね。いつなにかあるかわからない。携帯電話でしょう、それから名刺、紅もありますよ（にっこり、とても笑顔がかわいい）母が倒れたら起き上がれないの。

私も母を起き上がらせる事は出来ないでしょう。

―関節リウマチの日常はどうですか。

槇坪―いつも痛いですよ。いつも痛みがあります。四十年になりますね。車いすは七年前からですけど。

いい娘いい嫁

槇坪―関節リウマチってね、心と体のストレスでなるって聞きましたよ。いい娘、いい嫁しようとしてストレスが溜って、

まきつぼ たつこ 映画監督 広島県に生まれる。早稲田大学文学部演劇科卒。映画・TV・教育映画にスクリーンデビュー。映画製作に17年。作品に『子どもたちへ』『若人よ』『地球っ子』『わたしがSuki』『老親ろうしん』『母のいる場所』六作がある。映画『老親ろうしん』では山路ふみ子映画賞福祉賞、日本カトリック映画賞、藤本賞特別賞等、映画賞に輝く。40年前に関節リウマチに。7年前から車いすで映画製作。車いすに乗った小さな大監督と言われる。現在『母のいる場所』全国で上映会を展開中。



あらすじ（116分）

フリーライターでシングルマザーの主人公・久野泉（45歳 紺野美沙子）は7年間、脳血栓で右半身不随になった母・道子（馬淵晴子）の在宅介護と子育て、そして仕事に迫られる。70歳までは仕事人間だった独断的で頑固な父・賢一郎（小林桂樹）とは介護をめぐって終始喧嘩が絶えない。

小学生の息子・遼は、チック症になり、「僕にはお母さんがいない」と作文に書く…。高校に入ると、すぐ不登校になった。

泉はユニークな有料老人ホームの施設長・悠子（野川由美子）に出会い、入所を選択する。「Noを言わない」がホームの方針で、痴呆の人を、「お分かりにならない方」と呼び、酒もタバコも恋愛も自由、入居者もスタッフも「どもにいきいき輝いて暮らしている。やがて、母は笑顔を取り戻し、そこが「母の居場所」となる。

父の鼓に合わせて舞う母…：イメー
ジの舞台に八重桜が舞い散る

我慢しなくてもいいのに我慢して、嫁ぎ先が商家だったのね。頑張って、私ってお人好しなんですよ。心臓は強かった。内臓もね。だから無理して、急に手足が動かなくなってそれでも動ける所を動かして、腰かけて仕事しましたね。

夜痛む時など、今は母にさすってもら

います。二時間も三時間もさすってくれるんですよ。

—ありがたいですね。

槇坪—母は私の面倒を見てくれます。だから私は母に「ありがとう」と言います。その母が今、私に「ありがとう」と言ってくれます。やっと親子が対等になった気がします。私はひとりっ子でしてね、ずっといい娘してました。母はいつも「この子は大丈夫」って認めてくれていました。私は今ね、そういう母に日々愛情を感じるようになったわね。

離婚そして夢の映画監督

—監督になろうと思われたのは。

槇坪—二十八歳の時、離婚しましてね、米倉斉加年さんに相談したんです。「自立しなさい」と言われて、映画のスクリーンライターとして十八年やってきました。いつか映画監督になるのが夢でした。

—映画を撮りたいと思っても……。大きな資金が必要でしょう。

槇坪—そりゃ大きいですよ。すごい金額ですからね。

—アメリカでは監督・脚本・スタッフをみて、いい映画だと製作前から銀行や投資会社が資金を応援するって聞きますけど。

槇坪—そうです。日本はまだまだ、そこまではいきませんが、お蔭さまで、今で

は、私も借りることが出来るようになりましたけどね（笑い）。アメリカではそうですね。だから、お金を出す方も映画を製作する方も「いい作品を作ろう」と熱が入ります。そりゃ真剣ですよ。文化芸術に対する姿勢が違ってますね。国の予算も文化・芸術にはとても少ないですよ。日本の銀行にこういう脚本、こういう監督、こういう役者がと話しても理解出来る人はいません。まして出来上がつてもいない映画ですから（笑い）。本

当の豊かさ、あらゆる教養を培う文化が弱いんですね。夢がない、経済効率ばかりが優先されて、芸術に対して寄付、控除の考え方もない、お金もちのお年寄りの有効活用がなされていない（笑い）。

—欧米ではお年寄りが大学とか施設とかに多額の寄付をする話ってよく聞きますし税控除も大きいですよ。

槇坪—土地だってそうです。この近くだって、いっぱい空地があります。有効利用出来るのに、知恵ある人、体力ある人いるのに有効活用出来ていない。もったいない。

監督を軸に映画づくり

—さて、映画の撮影期間ってどの位でしょう。

槇坪—私は、40日位で撮り終えます。—もっと長いのかと思っていました。

槇坪—俳優さんやスタッフのスケジュールもありまして40日位が限度ですね。それ以上の拘束は無理です。資金のこともありますし。

—難しい俳優さんもおられると聞きますが。

槇坪—（うなづきながら）映画製作の場合、いろんな役割の人がいても監督を軸に動きますからそれはありません。俳優を生かす、自立した対等のふれ合いで仕事をします。

—この役にはこんな俳優さんとか考えて……後はどうなさるのですか。

槇坪—ひとりひとりにお会いして打ち合わせをします。積み重ねですね。そうしながら役作り、衣装と進み、脚本の読み合わせになります。

親子三代で……

—『母のいる場所』では脚本も書かれていますね。

槇坪—普通は脚本家ひとりなのですが、三分の一位書き入れた時は私の名前も入ります。たとえば、今回映画の中で息子の遼の誕生日の場面がありますが、我家だったらこんな場面かなあと思って自身の思いを加えています。実生活と重ねた場面もいくつかあります。映画の中には車いすの母も自然に出演してましてね（にっこり）。

—監督の映画音楽はご子息が手掛けておられるとか。

槇坪—（にっこり）。

—親子三代で映画づくりですね。これからもよい映画を製作して下さい。

槇坪—エー。よい映画になるためには、『母のいる場所』をひとりでも多くの方に観ていただくことです。観ていただくことで、次の映画製作費が出来ますからね（笑い）。

—もう、次の映画をお考えですね。

槇坪—（うなづきながら、にっこり）『老親』『母のいる場所』の傾向にするか、全く違ったものにするか思案中です。—たのしみしております。

車いすでメガホンを取る監督。そして痴呆の母親の介護もこなす。この情報は、圧倒されそうな位の女傑との印象を強くしたが、お会いしてみると小柄でやさしく、その微笑は、若輩者の私が見てもかわいかった。

いいかえれば、大きな節目をいくつもいくつも乗り越えられた、監督の強さのあらわれかもしれない。

問い合わせ 企画制作 パオ

TEL 03-3332-7150

ホームページ www.pao-jp.com